

# 魂の故郷

(昭和十二年寮歌)

山崎善陽君 作歌  
平城鷹雄君 作曲

一

魂の故郷に立つ  
星清き榆の園よ  
花芳る三春の夢  
感激の涙あふれて  
原始林蔭に盃かはす  
青春き日の記念の宴  
歌ふなり  
自治と自由の高き誇を

二

六十一年の青史は薫り  
郭公の啼声もはるかに  
紺青の入相の空  
魂は虚空に走せて  
往昔の意気を慕ふ  
尽きるなき川のせせらぎ  
夢ふかし  
残春あはきポプラ並木よ

三

いで湯湧く郷の宴は  
夜もすがら感激はてなき  
絢爛たる瞬間の夢  
落葉松の林時雨れて  
颼々の悲歌の調べは  
楡鐘の響と闇にさえゆく  
さびしらに  
秋深みゆく静寂の都

四

颼々の暴風おさまり  
際涯なき雪の荒野に  
皎々と月光冴ゆる  
櫓の音の玻窓にこほりて  
限りなき瞑想をさそふ  
悠久の時の流転  
人の世の  
悲しき運命ぞ明日の旅路は

五

曠野に高嘯ふ恵迪の健児  
毅然たり若き生命よ  
先人の崇き訓戒に  
大いなる野心育む  
慨世の憂はあれど  
ここ暫し休息もとめて  
いざ寮友よ  
のこりの春を惜しまざらめや